「る・らる（れる・られる）」の原義の学説史

――細江逸記と堀重彰の再評価――

岡田　誠

一　はじめに

本稿は、いわゆる「受身・可能・自発・尊敬の助動詞」と呼ばれる「る・らる（れる・られる）」の原義についての学説史を概観し、現在では引用率の低い細江逸記の「中相」概念、そして引用されることのない堀重彰の受身・自発をまとめて「被動」とする論を再評価するものである。両者とも、山田孝雄の影響や指導を受けながらも、それぞれ山田孝雄の「る・らる（れる・られる）」の受身根源説を異なる方面に発展させた見解を示している。その点で、「る・らる（れる・られる）」の原義についての学説史の中での重要性を述べる。

二　自発根源説

「る・らる（れる・られる）」の原義としては、主に「受身根源説」と「自発根源説」とがある。(1) 日本語学における「る・

らる」の原義の先行研究において、自発を根源とする説としては橋本進吉（一九三一）・金田一京助（一九四一）・時枝誠記（一九四一）・大野晋（一九六七）、受身を根源とする説は山田孝雄（一九三六）・松尾捨治郎（一九三六）・森重敏（一九六五）・川端善明（一九七八）・近藤泰弘（一九八三b）などが代表的なものとしてあげられるが、現在、「自発根源説」が優勢である。特に、すべての意味は自然にそうなるという自然の動きから発生したとする橋本進吉（一九三一）、それを継承し稲作農耕民は自然の成り行きを推移するのが自然で、自発から発生したとする大野晋（一九六七）の論が知られている。

また、音韻の立場からは、濱田敦（一九五五）が「ゆ・らゆ」から「る・らる」の音韻交替説（yu・rayu から ru・raru）で考えた結果、「ゆ・らゆ」は「自発」の使用例が圧倒的に多いことから、「る・らる」もこの流れの延長線上にあると考え、「る・らる」の原義を自発としている。しかし、朝山信彌（一九四二b）は、「『ゆ』『らゆ』との直接的な音韻変化を予定しようとする事は疑わしい」と述べている。その一方で、山田孝雄は（一九一三a）は「ゆ」「らゆ」は受身がもとで自発になり、さらに反転して受身の用法が出たと述べた。また、柳田征司（一九八九）や釘貫亨（一九九一）は「ゆ・らゆ」と「る・らる」とは別源であるとしたが、柳田征司（一九八九）は別源とはしながらも、無意志動詞を意志動詞化する四段活用の「ス」と対応して成立したとすると、意志動詞を無意志化する助動詞として「ユ」「ル」は自発を原義として、そこから可能・受身が発生したとしている。

三　受身根源説

山田孝雄（一九〇八）では、「る・らる」の原義には触れていないが、自発については、山田孝雄（一九〇八）の段階では、以下のように受身と可能とが渾然一体となったものと見ていることがわかる。

受身と勢力との混合よりなれるが如き一種の間接作用あり。之を自然勢といふ。何が故に受身と勢力よりなるものかといへば、自然勢にありては文主は自然的に受身の地位に立ちて自家の意志にて左右しうべきさまならず、しかも其は自然に發したる勢力にして他に發動者ありて起したるにあらず。この故に、受身なる點と勢力なる點とを具有せりと見るべく、自己の勢力にて自己が受身となれるものなればなり。（三七〇頁）

その後、山田孝雄（一九一三b）では「受身・可能・自発・尊敬」の順序で派生したとし（一三六頁）、山田孝雄（一九二二）では「受身・自発・可能・尊敬」と派生の順序を改め（一四六頁）、最終的に山田孝雄（一九三六）では、「る・らる」の原義を受身とし、「受身」「自発」「可能」「尊敬」の順番で派生したことを述べ、自発について以下のように述べている。

「る」「らる」は状態性の間接作用をあらはすものにして、その最も根本的なりと認めらるゝは受身をあらはすものなり。…〈中略〉…それより一轉して自然にその事の現はるゝ勢にあることを示す。今これを自然勢といふべしその例

坊主山の早蕨かと怪しまる。

眺めらるゝは故郷の空なり。

この自然勢が受身の一變態なりといふことは、その勢の起る本源は大自然の勢力にありて人力を以て如何ともすべからぬことを示すものにして、人はそれに對して從順なるより外の方途なきなり。これ即ち大なる受身といふべきなり。（三一七―三一八頁）

この記述から、自発を人間の力ではどうすることもできず、従順にならざるをえない大なる受身と考えていることがわかる。[2] その結果、山田孝雄（一九三六）では、最終的には以下のように述べ、受身の原義で統一し、客観性の特質を重視していることが分かる。

以上の四つの場合、これを還元すれば、受身の一に歸し、その作用の直接に行はるゝことを示すもの一もなし。而してその作用のあらはれ方いづれも傍観的なり。（三一八―三一九頁）

この山田孝雄（一九〇八・一九三六）の論をいっそう論理的に格関係の視点で発展させたものとして、森重敏（一九五六・一九六五・一九七一）の論があげられる。森重敏（一九五六・一九六五・一九七一）では、「る・らる・す・さす・しむ」は、格助詞と相関することから、「格の助動詞」であるとし、受身は主者が自由で、自発は主者が話し手に限定されるとする立場を取る受身根源説である。川端善明（一九五八）は森重敏の論を踏まえ、「ゆ」「らゆ」と「る」「らる」との関連性については切り離して考え、ヴォイス論の前提としての活用の起源について考察した。これ以前のものとしては、「ゆ・らゆ」と「る・らる」を別源として、「る・らる」はラ行下二段の自動詞語尾から発生したとする朝山信彌（一九四二b）がある。

川端善明（一九七八）は、使役の文構造は他動詞に連続し、それに対応する受身文の構造は自動詞に連続すると述べ、「受身―自動詞の受身―自発―自動詞」という連続性を述べている。その結果、川端善明（二〇〇七）では受身根源説で述べている。川端善明（一九九七）では以下のように述べている。

ヴォイスの助動詞ル（ラル）・ス（サス）が、前助動詞としての接尾語ル・スにおいて四段への傾向をもっていながら、下二段へ実現することにも、一つの選択、ヴォイスの助動詞にふさわしい、そして助動詞ムの場合のように隠れたそれではない、しかし基本的に等しい選択が、解釈されるであろう。（五〇三頁）

自動詞の受身については、川端善明（一九七八）は、意志を受けたかのような受身の形式と捉えている。

四　出来文・中相説・被動説

四・一　出来文

尾上圭介（一九九九）は、それまで有力とされてきた自発根源説について批判し、「る・らる（れる・られる）」が用いられた文は、その主語が動作発生の場であるもので、その文を「出来文（しゅったいぶん）」と名付け、「事態全体の生起」という、ラレル形式による話者の事態の状況把握でとらえ、多義性の説明を可能にした。川村大（二〇一二）は、自発根源説と受身根源説以外に、尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）の「出来文」を取り上げた。そして、「個別用法とは別の次元にラレル形固有の性格を想定する諸説」を立項し、Shibatani Masayoshi（一九八五）の「動作主背景化」、川村大（一九九三）の「非動作主の主語化」、柳田征司（一九八九）の「無意志自動詞根源説」、ヤコブセン・ウェスリー（一九八九）の「無意志自動詞根源説の修正展開」を修正・発展させたものとした。その上で、川村大（二〇一二）は、尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）の「出来文」を評価し踏襲している。この「出来文」という考え方は、現在、有力な論の一つになっているが、その考えは話者の事態の把握の仕方としての扱いに求めたものである。

この点については、柴谷方良（二〇〇〇）が、多義性の説明としては整理できたが、通時的な考察が欠如することを指摘している。つまり、「出来文」という考え方では、原義については除外するということになる。

四・二　中相説

細江逸記は英語学者であるが、日本語学の著述をなしている。日本語文法の分野で強く影響を受けた人物について、細江逸記（一九三一）では以下のように述べ、山田孝雄の影響を強く受けていることがわかる。

> ようやく名徹な見解を下そうとされた学者は草野清民氏であったが、不幸にも氏は早世されたので十分に氏の説を聞くことができないのは私の最も遺憾とするところである（遺著『日本文法』一二九―三〇ページ参照）。氏に次いで、さらに数歩を進めしっかりした立場を保持して名透な学説を立てられたのは今の東北帝国大学教授文学博士山田孝雄氏で、ほとんど暗中模索の状態にあった私の目に一条の光明を与えたものは実に私が明治43年ごろに読んだ博士の名著『日本文法論』であったので、私は終生無限の感謝を未見の恩師山田孝雄博士にささげるであろう。博士の『文法上の時の論』（同書四一三―四二ページ）には今日の私の首肯しかねる点もないではないが、しかもなお金玉の文字というべきである。（三五頁）

日本語のヴォイスの研究のさきがけをなすものとして、細江逸記（一九二八・一九四四）の「自発・受身」以前の「中相」という概念がある。細江逸記（一九二八）では山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・一九二二）の論を多く引用し、整理した形式の晩年の同様の細江逸記（一九四四）では山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・

一九二二・一九三六）を引用している。この「中相説」は、今泉忠義（一九三一）、永田吉太郎（一九五六）、金田一春彦（一九五七）によって評価された。その評価の仕方は、今泉忠義（一九三一）は「る・らる」の「意義分化の困難な例」をあげて受身・自発以前の「中相」の設定を評価し、永田吉太郎（一九五六）や金田一春彦（一九五七）は自動詞・他動詞以外の「中相動詞」の設定を評価した。しかし、現在では細江逸記（一九二八）の論は、あまり引用されることがなく、晩年に整理し直し、その後の先行研究も付け足して「中相」の概念を書いた同様の細江逸記（一九四四）は引用されることも触れられることもなく、川村大（二〇一二）が参考文献に記している程度である。

細江逸記は、テンス・アスペクト・ムードについては別個としないことを述べていることで知られているが、ヴォイスに関して述べた細江逸記（一九二八）では、山田孝雄（一九〇八）を頻繁に引用し、山田孝雄が動詞の自他を否定し、受身根源であるのに対して、細江逸記は便宜上としながらも、動詞の自他を用い、山田孝雄は（一九〇八）が自発を受身と可能との融合であるとする説と山田孝雄（一九一三a）の「ゆ・らゆ」が「る・らる」へと変化している想定で、「ゆ・らゆ」が受身→自発→受身の反転説を唱えることに疑問を呈し、受身よりも自発・可能の方が古く、さらには自発・可能以前に「中相」を設定し、その「中相」が上代に発達したもので、受身・自発・自動詞の前の段階のものであるとしている（一一一頁）。この論は晩年の細江逸記（一九四四）が山田孝雄（一九二二・一九三六）を踏まえて書いたものでも変わらない主張である。つまり、山田孝雄の影響を受けながらも、受身根源説ではなく自発根源説以前の「中相」を設定した点に大きな特徴がある。

細江逸記（一九二八）は、中相とやや類似した説として三矢重松（一九〇六）をあげているが、動詞の自他の根本についての考察に欠けている点で批判をしている（一〇七―一〇八頁）。この点について青木博史（二〇一〇）は、中相説は魅力的であるとしながらも、「自他対応形式として存在するレベルと、その対応関係を基に起こる『派生』レベルとでは

やはり異なるのではないか」（二二頁）と疑問を呈し、川村大（二〇一二）は、各用法における主語名詞の意味的立場や格表示の異同について触れていない点を指摘している（二五一頁）。

細江逸記（一九二八）では、日本語は英語やドイツ語とは異なることが一般に論じられているが、比較研究の立場からすると、印欧語族内でも異なって用いられていることを指摘し、「所相」は西欧諸国でも日常会話で用いられており、心理的に用いられる条件にも触れている（九六―一三〇頁）。この中でギリシア語や古代サンスクリット語と同様に、日本語にも中相というものがあり、[3]その「中相」を一種の原始的な相の在り方とし「ゆ」「らゆ」で示され、「所相（受身）」、「一部の自動詞」、「勢力」に発展し、「勢力」から「自然勢」、「能力」、「敬語」の順番に発展したと述べている（一一一頁）。これを以下のようにまとめている。

原始中相（一）自動詞
（二）勢力
（a）自然勢　（b）能力　（c）敬語
（三）所相
（一一二頁）

この図式は、原始中相を設定し、そこからの派生の順序を示したものである。現代の「る・らる（れる・られる）」の多義性において、「受身」「尊敬」「可能」「自発」以前の根源的な概念を設定したことで知られている研究として、柴谷方良（二〇〇〇）、尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）があげられるが、それ以前に細江逸記（一九二八・一九四四）がいたことは注目してよいと考える。

また、受身の本質にも触れ、山田孝雄、金沢庄三郎、三矢重松、チェンバレンなどの説を引用し、「日本語の受身は純粋な所相ではない」とし、中相を考えれば、自動詞の受身の存在も理解できると述べている。

このように、細江逸記のヴォイスの論は、「中相」という概念を用いた独特のものであるが、その背後には比較言語学と山田孝雄の影響をみることができる。

近年では引用されることが少ない「中相」という概念であるが、細江逸記（一九二八・一九四四）のように、古代ギリシア語に存在した「中相」というものが文献以前の日本にも存在し、その文献以前の「中相」は自動詞・受身・可能・自発とが渾然一体となったものであり、それらが痕跡として「ゆ」「らゆ」で示されていたとする点で再評価してよいであろう。それに対して柴谷方良（二〇〇〇）は諸外国の言語を参照し、この論を一歩進め、文献以前の段階で能動・自発という態対立があり、その自発文が受身文を派生させたとする見解を示している。

細江逸記（一九二八・一九四四）の論には批判はあるものの、文献以前の「中相」というものを設定することで、「る・らる（れる・られる）」の史的考察を促している。これに対して史的考察を考慮しない尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）の説が近年では注目され、引用されることが多いが、この説の特徴である「事態把握」という捉え方は、「中相」のように渾然一体としているという前提を踏まえているからこそ出てくるものではなかろうか。尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）では触れていないが、細江逸記（一九二八・一九四四）の方が先行し、それに類した着想をしている点で、再評価されてよいであろう。

四・三　被動説（受身・自発渾然一体説）

堀重彰（一九四一b）には、山田孝雄の序文がついている。さらに、自序で以下のように述べている。

この書を上梓するに當り、山田孝雄博士の御指導と御世話に預つたことは前著の場合と同様である。殊に御高閲をお願いした時は、特別に公務御繁忙の折柄であつたのであるが、微衷に深く御同情下され、御精査の上序文まで賜り、全く感謝の術も知らない次第である。（五―六頁）

このように山田孝雄の論を反映しているが、堀重彰（一九四一ｂ）は山田孝雄の論の引用は特になく、発展的継承を感じさせる記述になっている。前提として山田孝雄（一九一三ａ）が示したような「ゆ・らゆ」が「る・らる」への変化は想定せずに、切り離して考察している点が特徴的である。

堀重彰（一九四一ｂ）は、「被動には二種類がある。即ち『他に然せらるる』ものと『おのづから然せらるる』ものとである」（五〇一頁）と述べていることから、受身・自発を「被動」に含めている。その「被動」の中から受身が分離・抽出する過程を、使役との対応を優先させることで以下のように説明している。

被動構成の中心的な素材動詞は「ものを然する」ものに在ると言はなければならぬ。しかして「ものを然する」の「もの」には「者」と「物」とがある。有意的なる「もの」と無意的なる「もの」とがある。前者を素材動詞としては「他に然せらるゝ」受身が成立し、後者を素材動詞としては「おのづから然せらるる」自然が成立する。しかして前者を推進めその他動面を展開して行くところに「他に然する」「他を然さする」「他に然さする」等があり、それらが素材動詞となって又種々の受身形が成立して行くのである。しかし翻つて、「もの（者）を然する」自然形成立の動詞に於て、「他に然する」より生ずる如き受身形を取り得るもの、或は「みづから然する」発動的な自動詞に於て、「もの

（者）」より生ずる如き受身形をとり得るものもある。又自然に於ても、「みずから然する」の主体を潜在せしめることにより「もの（物）を然する」より生ずる如き意味の自然を成立せしめることが出来る。（一六七頁）

以下の記述は、受身・自発と可能・尊敬の相違点、及び受身から使役への過程で可能が出現し、受身から自発への過程で尊敬が出現する推測を行っている箇所である。

受身は主客が相互に対立的で、而も主が客に然せられるものであり、自然はかゝる受身を更に進め、主が客に包含せられる状態に於て主が客に然せられる意味のものである。かゝる主客の対立的関係の全然ないものに可能と敬意とがある。それは謂はゞ主客の一致である。受身から自然への方向と反対に、受身から使動への方向へ進み、その中道に於て客が主の裡に一致合同せるものが可能であり、受身から自然への方向を進み、その中道に於て主が客の裡に一致合同であるものが敬意である。（五〇三―五〇四頁）

この記述は、受身・自発を「被動」としているものの、その展開としては、格関係を転換する受身から対になる使役、さらには格関係を変えない自発への流れを基本として想定していることがわかる。このことは、「被動」の中の受身を出発点として、使役・自発への方向性の過程で、可能・尊敬を捉えている。これは、山田孝雄（一九〇八・一九一三b・一九二二・一九三六）の論を意識しながら、論理関係の視点によって意義分化を扱っており、いっそう山田孝雄の論を深化させていると言える。[4]

堀重彰（一九四一b）は、山田孝雄（一九〇八・一九三六）の論をいっそう論理的に格関係の視点で発展させた森重敏

（一九五六・一九六五・一九七一）の「格の助動詞」とし、受身は主者が自由で、自発は主者が話し手に限定されるとする立場を取る論に通じる。その上で、川端善明（一九七八）の「受身―自動詞の受身―自発―自動詞」につながるという位置づけになるため、堀重彰（一九四一b）の論は引用されることはないが、「る・らる（れる・られる）」原義についての学説史の中で、評価されてよいと考える。

五　「る・らる（れる・られる）」の原義の考察

「る・らる（れる・られる）」の原義についての筆者の見解を述べておきたい。「ゆ・らゆ」と「る・らる（れる・られる）」との関係であるが、「ゆ・らゆ」から「る・らる」への音韻交替の流れと見るか、別源と見るかで、以下のように諸説ある。

「る」

a　「ゆ」の音韻交替（yu から ru）説

・濱田敦（一九五五）・松尾捨治郎（一九三六）

b　「生る」が連用形についたとする説

・金田一京助（一九四九）

c　ラ変動詞「あり（有り）」が四段・ナ変・ラ変などについたとする説

・大野晋（一九五五）

d　「ある（有る）」の活用が下二段に変わったとする説

・松下大三郎（一九三〇）

「らる」

a　四段動詞に「る」のついた「取らる」「切らる」などからの類推

・・金田一京助（一九四九）

b　「らゆ」の音韻交替（rayu・raru）とする説

・・濱田敦（一九五五）

c　二段動詞の未然形に「r」を挿入してから「あり（有り）」がついたとする説

・・大野晋（一九五五）

現在、有力視されているのが「自発根源説」である。これは、「ゆ・らゆ」からの音韻交替説で考えると、「ゆ・らゆ」は「自発」で用いられることが圧倒的に多いことによる。佐伯梅友（一九三六）の指摘にもあるように、『万葉集』では、「ゆ」は自発的可能の用例が圧倒的に多い。また、「らゆ」については、「寝の寝らえぬに」という慣用表現に用例が集中している。

しかし、金田一春彦・奥村三雄（一九七六）や窪薗晴夫（一九九七）が述べるように、「r」から半母音の「j」「w」に変化するのが自然である。そうすると、「ゆ・らゆ」の「y」、つまり「j」の音が「る・らる」の「r」の音に変化するのは逆の現象であり、不自然で無理があるようにも思える。その立場で考えると、「ゆ・らゆ」から「る・らる」への自然な変化ではなく、それぞれが持つ、基本的な意味役割に違いがあるのではないだろうか。たしかに「ゆ・らゆ」と「る・らる」は、音の響きは似ているため反論の余地はあるだろうが、音韻交替説に縛られる必要はないため、一般に有力とされている「る・らる」の根源的な意味が自発である必然性はないのではなかろうか。

この点で「ゆ・らゆ」と「る・らる（れる・られる）」とは、別源であると考える。後世「る」「らる」の方が行われるようになるのは、柳田征司（一九八九）の述べるように、「らゆ」「らる」が生まれて、「ゆ」の存在意味が弱まり、古形の「る」は残存し、意味上の対をなす「す」（下二段）に「さす」が生まれ、これと形の上で対応する「らる」の方が選ばれたことによると考える。

「受身根源説」では、語彙的にとらえた場合に、「受身」の意からの「自発」「可能」「尊敬」への説明が難しい。それに対して、「自発根源説」では、尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）が指摘しているように、「る」「らる」の助動詞相互承接の関係図では、活用形が完備している「る」「らる」は、動詞のすぐ下にくる。そしてそれらは、主観性の弱い助動詞になるわけであり、逆に活用形が完備していないものほど下にきて、「不変化助動詞」、すなわち、主観性の強いものとなる。そうしたときに、「自発」は主観性が強いので、「自発根源説」はうまく適用できない。

意味としては、時枝誠記（一九四一）の言語の発話者と聞き手の場、その論を踏まえて展開した近藤泰弘（二〇〇〇）の言語の発話主体の主観的表現及びダイクシスの視点、吉田金彦（一九七一）の「自然勢とその承認及び主体の把握の仕方」を考慮すると、本来は受身と自発とが渾然一体となったものが原義ではなかろうかと考える。そして、ニュートラルの状態では主客合一であるものが、動作主体と発話主体との動きへの変化に伴って生じる現象ではなかろうか。堀重彰（一九四一b）の述べるように、自発と受身は「被動」であると考え、その区分けの基準は、発話主体と動作主体に応じたものであると考える。すなわち、発話者の主観表現の意識が薄くなり、動作主体となるときには受身となる。その一方で、発話者の主観表現が強くなり発話主体となるときには自発になる。このように発話者の主観性の強弱によって、「自発」と「受身」との間で意味が揺れ動いていると考える。

六　結び　細江逸記・堀重彰の再評価

本稿では、山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・一九二二・一九三六）の影響を受けながらも異を唱え、「る・らる（れる・られる）」の原義の源流に「中相」を設定した細江逸記（一九二八・一九四四）、そして山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・一九二二・一九三六）の受身根源説を被動の枠組みの中に「受身・自発」を包含して説明した堀重彰（一九四一b）の論を再評価したい。

現代の「る・らる（れる・られる）」の多義性において、「受身」「尊敬」「可能」「自発」以前の根源的な概念を設定したことで知られている研究として、柴谷方良（二〇〇〇）、尾上圭介（一九九八a・一九九八b・一九九九・二〇〇三）があるが、それ以前に細江逸記がいたことは注目してよい。また、堀重彰の「被動」の論は、山田孝雄から森重敏の格の論理及び発話主体と動作主体の視点に発展する流れとは異なる。山田孝雄の影響を受けながらも山田孝雄（一九〇八）の受身根源説を批判し、その根源に「中相」を設定したのが細江逸記である。それに対して、山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・一九二二・一九三六）の受身根源説に即してはいるが、受身と自発との融合したものを「被動」にしたのが堀重彰である。このように、同じ山田孝雄の影響を受けながらも根源説を別の方向性に向けて行った細江逸記と、その延長線上に発展させていった堀重彰の両者は興味深い。また両者と山田孝雄との関わりについては、山田孝雄の著作において感化されて日本文法を手掛けるようになった細江逸記と、山田孝雄と直接交流のあった堀重彰という関係性についても注目されるところである。山田孝雄の論との影響関係を整理すると以下のようになる。

A　山田孝雄（一九〇八）

自発を受身と可能との融合であると規定した。

B　山田孝雄（一九一三a）

「ゆ・らゆ」は「受身・自発・受身」の展開で反転を想定した。

C　山田孝雄（一九一三b）

「受身・可能・自発・尊敬」の展開を想定した。

D　山田孝雄（一九二二・一九三六）

「受身・自発・可能・尊敬」の展開で傍観的と述べた。

・・**細江逸記**（一九二八・一九四四）

文献以前に「中相」を想定し、「自発・受身」の展開とした。

「中相」・「ゆ」「らゆ」・「る」「らる」を想定した。

・・**堀重彰**（一九四一b）

「ゆ・らゆ」と「る・らる」を別源で考察し、「被動（受身・自発）」が根源で受身から自発への展開から尊敬が現れ、受身と使役との対応から可能が現れるとした。

「る・らる（れる・られる）」の受身根源説の学説史を扱ったが、受身根源説の場合、論理的な深化をみることができる。整理すると、以下のようになる。

【批判的継承の流れ】

a　山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・一九二二・一九三六）

・・**細江逸記**（一九二八・一九四四）・・柴谷方良（二〇〇〇）

【理論的・発展的継承の流れ】

b　山田孝雄（一九〇八・一九一三a・一九一三b・一九二二・一九三六）

・・b一　**堀重彰**（一九四一b）

・・b二　森重敏（一九五六・一九六五・一九七一）・・川端善明（一九五八・一九七八・一九九七）

以上、「る・らる（れる・られる）」の原義の学説史の中で、現在の山田孝雄の影響下の、「ゆ・らゆ」と「る・らる（れる・られる）」を同源とするか別源とする二つの流れの中で、細江逸記と堀重彰は、それぞれ後の研究につながる橋渡し的な位置づけを占めている点で重要である。そのため、近年では引用されない細江逸記と、引用されることのない堀重彰を「批判的継承の流れ」と「理論的・発展的継承の流れ」として再評価したいと思う。

注

（1）「受身根源説」と「自発根源説」に応じて、意味展開についても諸説あるが、一般的に優勢なものをまとめると、主に以下の二種類に大別できる。

a受身・自発（自然勢）・可能（能力）・尊敬（敬語）

b自発（自然的実現・勢相）・受身（所相）・可能・尊敬（敬相）

朝山信彌（一九四三）は、「所謂自然可能と受身とは、その基底において共通性を有する二個の心理現象であることは考へられる。…〈中略〉…所で此処にはその二個の心理現象が明らかに一個の助動詞による表現によつて言語化された古代国語の性格を

我々は見る事が出来るのである。それは少くともこの二個の心理現象が一個の現実的な意識の中に統轄されて居た事を示す」と述べている。吉田金彦（一九七一）は一歩進めて以下のように記述し、感じ方によって自発か受身かになることを述べている。

自然勢とその存在の承認という意識が「れる」に付きまとっており、そのような根本的意味が「れる」の語性の客観性を保持しているように思える。『れる』のもつ客観性・間接性を主体がどちら側から把握し、どのように感じ取るかによって、意味分化が行われるのではないだろうか。（一一二頁）

（2）北澤尚（一九八七）は、『自発』とは、一人称単数の補語を隠し持った知覚・思考・発話活動を表す動詞の受身のことであり、それと他の受身とを特に区別して扱うための文法術語にすぎないと考えられる」と述べている。また、森岡健二（一九九四）は松下大三郎の枠組みを踏襲してはいるが、自発を可能の項目に含ませており、自発を立項していない。これらの考え方を用いれば、自発という項目を立項しなくても、受身で説明ができそうである。

（3）細江逸記（一九二八）は以下のように述べている。

我が國語の動詞は、太古の或時代に於ては丁度梵語のParasmai-Pada Atmane-pada；希臘語のActive Voice Middle Voiceに比すべき二語形の併立を有して居た。予はこれを「能相」「中相」と名付けるが両形が劃然と分離した當初に於ては「中相」は「能相」に「ゆ」なる語尾を附けたものであつたが、やがて動詞の種類の増加し活用の複雑となるにつれて「ゆ」・「らゆ」を添えた姿となり、奈良朝期に入る前より「ゆ」・「らゆ」は「る」「らる」に転じはじめ、平安朝期以降に至りて大方は「る」・「らる」となつて仕舞つた。随つて散り残された若干の「ゆ」を有する動詞はその由来を忘れられて独立本来の動詞の如くに感ぜられた。否、或は多くの場合には早独立本来の動詞の如く感ぜられたから取り残されたといつた方が良いかもしれない。（一一一頁―一一二頁）

（4）「被動」という用語は松下大三郎（一九二八・一九三〇）や高橋龍雄（一九三七）も用いた用語である。高橋龍雄（一九三七）は「る・らる（れる・られる）」の形式で示されるものを「被動」として、「人格的被動」（受身）と「自然的被動」（自発）に分け、受身と自発を被動としている。堀重彰は、松下大三郎（一九三〇）とその流れにある高橋龍雄（一九三七）の枠組みを用いる形で、意味展開の相互関係について堀重彰は説明したと推測できそうである。また、富山市立図書館山田孝雄文庫には、堀重彰（一九四一b）が収納されている。

参考文献

青木博史（二〇一〇）『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
朝山信彌（一九四二a）「国語の受動文について（一―三）」『国語国文』一二巻一一号
朝山信彌（一九四二b）「国語の受動文について（一―三）」『国語国文』一二巻一二号
朝山信彌（一九四三）「国語の受動文について（一―三）」『国語国文』一三巻六号
今泉忠義（一九三一）「助動詞る・らるの意義分化」『國學院雑誌』三月号
大野晋（一九五五）「万葉時代の音韻」『万葉集大成　六』平凡社
大野晋（一九六七）「日本人の思考と日本語」『文学』一二号
尾上圭介（一九九八a）「文法を考える　出来文（一）」『日本語学』一七巻六号
尾上圭介（一九九八b）「文法を考える　出来文（二）」『日本語学』一七巻九号
尾上圭介（一九九九）「文法を考える　出来文（三）」『日本語学』一八巻一号
尾上圭介（二〇〇三）「ラレル文の多義性と主語」『月刊言語』三二巻四号
川端善明（一九五八）「動詞の活用―むしろVoice論の前提に―」『国語国文』第二八巻一二号
川端善明（一九七八）「形容詞文・動詞文概念と文法範疇―述語の構造について―」『論集日本文学・日本語　五』角川書店
川端善明（一九九七）『活用の研究Ⅱ』清文堂
川端善明（二〇〇四）「文法と意味」『朝倉日本語講座・六・文法Ⅱ』朝倉書店
川村大（一九九三）「ラル形式の機能と用法」『松村明先生喜寿記念　国語研究』明治書院
川村大（二〇〇四）「受身・自発・可能・尊敬―動詞ラレル形の世界―」『朝倉日本語講座・六・文法Ⅱ』朝倉書店
川村大（二〇一二）『ラル形述語文の研究』くろしお出版
菊地信夫（一九四〇）「上代国語動詞の相に就て」『文化』七巻一〇号
北澤尚（一九八七）「無生名詞を主語とする受身文―日本史教科書を資料として―」『東横国文学』第一九号
金田一京助（一九四一）『新国文法』武蔵野書院
金田一京助（一九四九）『国語学入門』吉川弘文館

金田一春彦（一九五七）「時・態・相・および法」『日本文法講座1』明治書院
金田一春彦・奥村三雄（一九七六）「国語史と方言」『国語学』二二七号
釘貫亨（一九九一）「助動詞『る・らる』『す・さす』成立の歴史的条件について」『国語学』一六四集
窪薗晴夫（一九九七）「音声学・音韻論」『日英対照による英語学概論』くろしお出版
近藤泰弘（一九八三a）「可能」『研究資料日本古典文学・一二巻』明治書院
近藤泰弘（一九八三b）「自発」『研究資料日本古典文学・一二巻』明治書院
近藤泰弘（二〇〇〇）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
佐伯梅友（一九三六）『国語史―上古篇―』刀江書院
柴谷方良（一九七八）『日本語の分析』大修館書店
Shibatani Masayoshi（一九八五）「Passives, and Related Constructions : a prototype analysis」『Language』六一―四
柴谷方良（二〇〇〇）「ヴォイス」『文の骨格』岩波書店
高橋龍雄（一九三七）『高等国文法概説』中文館書店
時枝誠記（一九四一）『国語学原論』岩波書店
永田吉太郎（一九五六）「動詞の相に関する考察」『国語と国文学』第八巻第八号
橋本進吉（一九二九の講義）「日本文法論」［テキストは、橋本進吉（一九五九）『国文法体系論』岩波書店］
橋本進吉（一九三一の講義）「助詞・助動詞の研究」［テキストは、橋本進吉（一九六九）『助詞・助動詞の研究』岩波書店］
橋本進吉（一九三五）『新文典別記上級用』冨山房
橋本進吉（一九三六）『改訂新文典別記初級用』冨山房
濱田敦（一九五五）「助動詞」『万葉集大成　六』平凡社
細江逸記（一九二八）「我が国語の相（Voice）を論じ、動詞の活用形式を分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」『岡倉先生記念論文』研究社
細江逸記（一九三一）『動詞時制の研究』【テキストは篠崎書林の新版】
細江逸記（一九三二）『動詞叙法の研究』【テキストは篠崎書林の新版】

細江逸記（一九四四）「我が国語の動詞の『諸相』（Voice）並びに動詞活用形式分岐の初期相に就いて」『大阪商科大学・同経済研究所　経済学雑誌』第一四巻三号
堀重彰（一九四一a）『日本文法機構論』畝傍書房
堀重彰（一九四一b）『日本語の構造』畝傍書房【テキストは小野正弘解説（一九九七）『日本語の構造』勉誠社】
松尾捨治郎（一九三六）『国語法論攷』【テキストは『国語法論攷（追補版・一九七〇）』白帝社】
松下大三郎（一九二八）『改選標準日本文法』紀元社
松下大三郎（一九三〇）『標準日本口語法』中文館書店
三矢重松（一九〇八）『高等日本文法』明治書院
森岡健二（一九九四）『日本文法体系論』明治書院
森重敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房
森重敏（一九六五）『日本語文法―主語と述語―』武蔵野書院
森重敏（一九七一）『日本文法の諸問題』笠間書院
柳田征司（一九八九）「助動詞『ユ』『ラユ』と『ル』『ラル』との関係」『奥村三雄教授退官記念・国語学論叢』桜楓社
山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』宝文館
山田孝雄（一九一三a）『奈良朝文法史』宝文館【テキストは改訂版（一九五二）】
山田孝雄（一九一三b）『平安朝文法史』宝文館【テキストは改訂版（一九五四）】
山田孝雄（一九二二）『日本文法講義』宝文館
山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』宝文館
ヤコブセン・ウェスリー（一九八九）「多動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版
吉田金彦（一九七一）『現代語助動詞の史的研究』明治書院

【謝辞】
本稿は、第三三八回 日本近代語研究会（於国立国語研究所）での口頭発表の原稿をもとに、大幅に加筆修正したものです。席上、

田中章夫（学習院大学名誉教授）、湯浅茂雄（実践女子大学教授）、橋本行洋（花園大学教授）から貴重なご意見を賜りました。また、本稿の基本的な構想を御指導くださった、今は亡き杉浦克己（元放送大学教授）に御礼申し上げます。